

Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2023.7.10

Vol.7

3月～5月（季刊）



熱が続くため受診した小児患者を診察する井上信明医師（中央）

「日本の心を届ける」トルコ地震に際し、国際緊急援助隊医療チーム二次隊にNCGM国際医療協力局 井上信明医師が派遣されました

2023年2月6日、トルコ南部のGaziantep県を震源とする大地震に際し、日本政府は国際緊急援助隊救助チーム、続いて医療チームを派遣しました。井上信明医師は、医療チーム二次隊のメンバーとして、2月23日～3月8日、現地に派遣され、総勢70名近い隊員と協力し、被災地域の国立病院の診療を支援する活動を行いました。今回医療チームは、外来だけでなく入院や手術、分娩にも対応できる設備を展開しました。

井上医師は、「被災された方々に寄り添い、丁寧な診療を提供することを医療チームの目標としていました。笑顔になって帰宅される方々から感謝の言葉をいただき、その役割を果たすことができたように思います」と語りました。

研修医の窓

新入職の研修医を迎えました

研修医2年目・三澤 佑太郎

研修医の入居する寮の玄関先には、大きな桜の木がその枝葉を広げています。そしてその桜は、新たに入職した研修医を歓迎するように、毎年3月下旬に満開を迎え、4月には病院への道に白桜色の花筵を敷きます。2年次を迎えた私は、その花筵に季節の巡りを感じ、そして入職してからの1年間を思い返しました。

NCGMの初期研修の特長として、（指導医の先生方やコメディカルスタッフの方々が素晴らしいのはもちろん）研修医同士で助け合う文化があります。手技や病棟業務の講習会、指導医の先生をお呼びしての勉強会、そして昨年度からは内科当直のM&Mカンファが、2年目研修医主催のもと自立的に開かれてきました。

業務に限らずプライベートについても、悩める1年目があれば、その同期のみならず2年目も寄り

添い、手を差し伸べました。1年次の私も、例に漏れず研修を通して数多くの試練や苦悩を抱えましたが、2年目の先生方のお陰もあって、それらを乗り越え成長できました。

昨年度の2年目の先生方と比較して、今の私はどうでしょうか。1年目の見本となるだけの診療能力を備えられているでしょうか。そう自問すると、目指すべき目標や課題が現れて、より一層、日々の研修に身が入ります。

4月も下旬になって、玄関先の桜は新しい緑を芽吹かせています。



寮の玄関前の桜

World Best Hospitals2023にセンター病院が選出されました

2023
Newsweek
POWERED BY
statista

CENTER HOSPITAL OF THE NATIONAL
CENTER FOR GLOBAL HEALTH AND MEDICINE

Newsweek社が世界28か国の8万人以上の医療従事者を対象としたオンライン調査などの独自調査によるランキングにおいて、当院は、世界TOP250中73位、日本国内では5位に選出されました。

研修医の窓

乳腺・腫瘍内科で研修させていただきました センター病院 初期臨床研修医1年目・金子 貴大

当院の乳腺・腫瘍内科での研修中にレター(Letter to the editor)の執筆に取り組ませていただきました。レターとは、ある論文に対する意見や疑問点を論文形式にまとめたものです。今回GAP70+試験という研究に対するレターを執筆しました。論文を読んで自分が考えた疑問点に対して指導医からアドバイスをいただき、抄読会での議論も元にレターを執筆しました。昨年11月に投稿し、無事受理されました。患者さんへ適切な診療を行うには新しい情報に対する批判的吟味が重要ですが、レターの執筆を通じてその力が身についたと感じています。

また、今年の3月9日にAYA weekでのイベントとして移行期医療に関するオンラインセミナー

を開催させていただきました。外部の先生方をお招きし、パネルディスカッションの司会進行を努めました。事前準備など大変でしたが、移行期医療について深く学ぶことが出来ました。

様々な貴重な機会をくださった乳腺・腫瘍内科の先生方にいま一度、厚く御礼申し上げます。



AYA week 2023
NCGM オンラインセミナーにて

世界マラリアデーの4月25日を挟んで3日間、センター病院アトリウムで関連ポスター展示が行われました

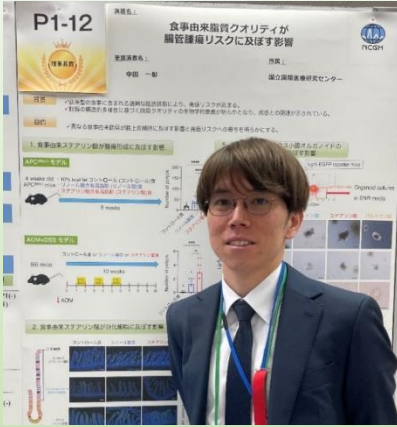
世界マラリアデーを記念し、熱帯医学・マラリア研究部では、センター病院中央棟アトリウムで、マラリアの流行状況や同研究部の活動報告に関するポスター展示を行いました。この3年間のコロナ禍で、世界のマラリア患者数は増加傾向を示し、年間2億4700万人（WHO, 2022）に至りました。

狩野部長は「今こそ、世界のゼロマラリアを目指す新たな決意を示さねばなりません」とのメッセージを発信しました。



熱帯医学・マラリア研究部
メンバーとアトリウムに展
示されたポスター

4月22日、6NCリトリートポスターセッションが開催されました



4年に1度の日本医学会総会（学術展示）が4月20日から4月23日、東京国際フォーラムで開催されました。

第31回目となる本学会は、NCGMの名誉理事長でいらっしゃる春日雅人先生が会頭を務め、NCGMからは115名が参加しました。

本学会のプログラムの一部である「6NCリトリート」は、若手研究者のポスターセッションを中心とし、6NCの研究者・医療者の交流を図ることを目的としています。

6NCリトリートにおいて、NCGMでは中田一彰先生が理事長賞を受賞されました。

「食事由来脂質クオリティが腸管腫瘍リスクに及ぼす影響」で受賞した中田一彰先生は、「6NC合同リトリートにて理事長賞を受賞することができ大変嬉しく思います。

また、本リトリートにおいて、若手研究者の発表の場や専門分野以外の先生との情報交換の機会を頂けたことは、自身の研究の発展のための励みとなりました。引き続き研究活動に精進し、次年度のリトリートにも参加したいと思えます。」とコメントしました。

国際医療協力局の坪井基行医師が第31回日本医学会総会2023東京で「日本医学会総会奨励賞」を受賞しました。

本賞は「医学上、優れた業績を上げた若手研究者を表彰し、今後の医学会を活性化すること」を目的に設けられた賞です。

坪井医師は受賞講演にて、「感染症疫学研究を通じての日本そして世界の感染症対策への貢献」という演題で、過去に実施した日本全国の空港/港検疫でのCOVID-19に関する疫学研究、Lancet Global Healthに掲載された世界のmen who have sex with men

における梅毒の有病率に関するシステマティックレビューとメタ解析について紹介しました。



4月、脊椎外科を新設しました

当院の整形外科ではこれまでも脊椎疾患の治療を行ってまいりましたが、脊椎疾患に対応する部門として脊椎外科が開設されました。松林嘉孝（科長・医長）、坂本龍司（脊椎内視鏡手術認定医）、熊埜御堂雄大（整形専門医）の3人の体制で、全ての脊椎疾患に対応いたします。窓口としては、これまで通り整形外科で受け付けておりますので、お困りの脊椎症例がありましたら整形外科までお気軽にご相談ください。

変性疾患はもちろん、小児の疾患（側弯症、ダウン症などの環軸椎亜脱臼、脊髄疾患など）、腫瘍性疾患、脊柱変形などの手術・保存加療も対応しております。前勤務先では脊椎周囲の悪性腫瘍に対して臓器と脊椎の合併切除を様々

な診療科と合同で行ってまいりましたので、ご協力できることがありましたら是非ご連絡ください。また、脊椎の転移性腫瘍によりADL制限がある患者さんに対しても、症例を選んで低侵襲な手術を行うことで原疾患の治療再開や日常生活に戻るお手伝いができる場合がありますので、こちらもお相談いただければと存じます。

院内で適切な脊椎診療がスムーズにご提供できるように努めてまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



左から坂本医師/松林科長/熊埜御堂医師

国際庭園は、ボランティアの皆様によって色とりどりの花を咲かせています

センター正面玄関前の国際庭園は、ボランティアの皆様によって定期的に花や苗の植え替えが行われ、手入れが行き届いています。

「NCGMにはお世話になったので、感謝を込めてみんなと協力しながら活動に励んでいます。土、花、風など自然の匂いでほっとする、四季を感じられる憩いの場となる庭園を目指します。患者さんや職員に感謝されると、大変嬉しく思います。」とボランティアの方がおっしゃいました。

園芸会社の方からは「庭園に植えたアイリス類は、『虹の女神イリス』から由来するそうです。コロナ禍で虹のステッカーが認知され、コロナ禍が明けたとき、庭に虹がかかるように国際庭園をデザインしました。」と素敵な紹介がありました。



3月22日、令和4年度 箱根山賞授賞式が行われました



箱根山賞を受賞した浦木 隆太上級研究員
(ウイルス感染動態研究部)

第15回を迎えた箱根山賞(特に顕著な研究成果を上げた研究者に授与される賞)、箱根山奨励賞(優れた研究業績が認められた44歳以下の若手研究者に授与される賞)、また第3回の箱根山特別功労賞の各賞受賞者が発表されました。

○箱根山特別功労賞



岡 慎一センター長(ACC)



竹村 信行診療科長(センター病院肝胆膵外科)

○箱根山奨励賞



城下 郊平客員研究員(研究所生体恒常性P)



都築 慎也応用疫学研究室医長(DCC)



矢田 智之診療科長(国府台病院消化器科)

3月22日、令和4年度 GLOBAL HEALTH AWARD (本賞)、および若手奨励賞の授賞式が行われました



選考経過を発表する藤田部長

本賞は、国際医療協力局の明石秀親部長が受賞し、また、若手奨励賞（GLOBAL HEALTH YOUNG ENCOURAGEMENT AWARD）は、医療教育部門の佐伯壮一郎臨床研修医、グローバルヘルス政策研究センターの若林真美上級研究員、国際医療協力局の宮崎一起看護師が受賞しました。



佐伯壮一郎臨床研修医



若林真美上級研究員



(左から) 藤田部長、佐伯臨床研修医、若林上級研究員、国土理事長
(スクリーン上に) 宮崎看護師

3月3日、NCGMはラオス保健省ラオス国立パスツール研究所(IPL)とSATREPSプロジェクト実施のための共同研究協定を締結しました

国土典宏理事長とPaul Brey IPL所長は、「地球規模課題対応国際科学技術協カプログラム (SATREPS:JICA/AMED)」(革新的技術を活用したマラリアおよび顧みられない寄生虫症の制圧と排除に関する研究開発、主任研究者：石上盛敏熱帯医学研究室長)を実施するため、MOUを締結しました。

本研究プロジェクトは、2023年度から5年間にわたり、ラオスのマラリア、メコン住血吸虫症、およびタイ肝吸虫症の排除と制御に貢献するものです。同時に、同国の若手研究者人材の育成にも貢献します。

調印式は多くの関係者の立ち合いのもと、NCGM研究所で執り行われました。



MOU締結式 署名の様子



(前列左から)バラタン在日フランス大使館科学技術担当官、マルティ＝ドシュ在日フランス大使館科学技術参事官、グラヴィエIPL事務局長、プレイIPL所長、ドアンダヴォン在日ラオス大使館二等書記官、NCGM国土理事長、武井企画戦略局長、池田国際医療協力局長、石坂研究所副所長

(後列左から)狩野研究所部長、AMED栗原、八木岡、朴主幹、JICA伊藤、久保倉副室長、スクンタバイIP日本事務局、マチルダIPL所長夫人、石上研究所室長、富田栄研化学(株)研究所副所長、友川信州大学准教授、熊谷東京医科歯科大学助教、京谷栄研化学(株)

NCGMとフィリピン大学マニラ校が共同研究に関する覚書(MOU)延長に調印しました



MOUに署名を確認するDr. Dalmacioと
狩野部長

(後列左から : Dr, Tammy Dela Rosa, Director, Office of international Linkages, UPM; Prof. Arlene G. Bertuso, Chair, Department of Parasitology, CPH; Prof. Pilarita T. Rivera, Dept of Parasitol, CPH; Dr. Fernando B. Garcia, Jr., Dean, CPH, UPM; Eva Maria Cutiongco-de la Paz, Executive Director of the National Institutes of Health, UPM; Benjamin P. Sablan, Jr., Director, National Clinical Trials and Translation Center, UPM)

2023年1月14日、フィリピン大学マニラ校 (University of the Philippines Manila: UPM) とNCGMは、それぞれ包括的連携協定 (MOU)の延長に合意し、NCGM国土理事長とDr. Carmencita D. Padilla, Chancellor of UPMが延長合意書に署名しました。今回、MOUの5年間の延長により、UPMとNCGMとは、互いの研究機関としての長所と過去5年間の成果を再確認し、NCGM臨床研究センターが主導する「ASEAN臨床研究ネットワーク拠点」の機能拡充や、またマラリアをはじめとする熱帯感染症やその他関連する疾患の予防や治療、流行対策に資する国際共同研究の成果の発展を目指します。

3月8日にUPMで開催された署名式典では、証人としてUPMからはDr. Leslie Michelle M. Dalmacio, Assistant to the Vice Chancellor for Academic Affairs, UPM)他、NCGMからは狩野繁之部長 (研究所 熱帯医学・マラリア研究部) 他が参加しました。



関係者集合写真

右から3人目は、Dr. Maria Rejane Umamoフィリピン・アシスタント地域マネージャー (DIT, CCS, NCGM)

センター病院診療科 シリーズ No.3

総合診療科

NCGMのミッションの一つである、「すべての病態に対応でき、誰一人取り残さないこと」を達成するために、総合診療科では、各専門科との協力そして皆さまのご指導のもとで、できる限りすべての人を受け入れる姿勢で居続けます。

総合診療科は、以下のとおり、病院内で「つなぐ」仕事をいつでも提供します。

- ・ 人と人をつなぐ、医療面接でのコミュニケーション技法の向上と普及
- ・ 患者さんの心と体をつなぐ、包括的な診療
- ・ 医療と介護、生活をつなぐ、包括的な診療とケア
- ・ 患者と病院をつなぐ、時間外救急診療への貢献
- ・ 卒前教育と病院での臨床研修をつなぐ
- ・ 医師と他職種を、教育の観点でつなぐ
- ・ 小児科と成人科をつなぐ、移行期医療
- ・ 日本と世界をつなぐ、外国人診療

総合診療科の外来では臨床研修医が丁寧に患者さんのお話を伺い、必ず指導医と相談をしながら診療を行います。研修医は6年間の最新の医学教育を全うして幅広い知識とスキルのもとで臨床研修に臨んでいます。経験を積み、将来は医療のリーダーシップをとり中心的役割を担っていく存在です。臨床研修に対する様々な方面からのご支援に感謝いたします。

病棟では急性期を中心に様々な病状や問題を有する患者さんを担



臨床研修医(中央)の診察を指導医(右)が確認している場面

当します。生物学面のみならず心理面、社会面でも分析をして、患者さんやご家族の社会的な生活の力を回復できるよう取り組みます。

昨今の何かと厳しい社会、医療の現場において、患者さんに幸せと安楽を届けるためには、病院の職員自身の健康も大切です。職員の皆さま一人ひとりへの愛と感謝を示すことにも、私たちは努めて参ります。NCGMのスタッフの皆さま、ありがとうございます!!

(総合診療科診療科長 稲垣剛志)



我々は、主に上部消化管悪性腫瘍を中心とした集学的治療や腹膜炎やイレウスなどの急性腹症の診療を行っております。

食道癌、胃癌などの悪性疾患に対しては、鏡視下手術やロボット支援下手術も行い、放射線・化学療法、終末期医療まで一貫して担っております。

近年、全国的に手術患者層の高齢化が課題で、食道癌や胃癌では低栄養やサルコペニアなどに対応していくことが求められています。そこで我々は、

チームSCRUM(Team for Surgical Recovery Upgrading Management)と名付けて、リハビリテーション科、歯科口腔外科、薬剤部、管理栄養部などと連携した多職種連携医療を推進しております。これにより、術前から積極的な栄養療法やリハビリテーションの介入がスムーズになり、術後に至るまで総合的なフォローアップが可能となりました。

また、2019年には肥満症に対する腹腔鏡下スリーブ状胃切除術も導入しております。減量だけでなく糖尿病などの肥満関連疾患の改善に寄与する手術ですので、肥満症の症例がいらっしゃいましたらご相談ください。

教育・研究の面では、臨床研究も積極的に行っており、連携大学院制度を利用して学位を取得する若手医師も輩出しております。手術指導では、難易度の高い手術に対しても、厚い指導層を活かして若手医師が順調に経験を積めるように指導しています。さらには、風通しの良いチームワークを強みとしており、働き方改革として積極的な年休取得や柔軟な働き方の推進なども行っております。

(食道胃外科診療科長 山田和彦)

センター病院診療科 シリーズ No.5

リハビリテーション科

<入院症例中心の訓練>

リハビリテーション科はベッドはなく、主に、他科に入院されている皆様の訓練・回復支援を行っております。脳血管疾患・運動器・呼吸器・心臓疾患・がん・嚥下障害等、幅広く対応しております。当院からの転院・退院の際には、リハビリテーションの内容等について情報提供



心肺運動負荷試験実施中

連携をさせていただいております。ご不明の点がありましたら気軽にお問い合わせください。

<外来受診のご案内>

地域の先生方からの、①嚥下障害、②装具や靴型装具、車いすのご相談、③ボトックスの適応、④神経筋疾患のロボットスーツHAL訓練、④その他リハ専門医でお役に立てること のご相談・ご紹介には喜んで対応させていただきます。

<フォローアップ評価>

当院退院後、地域でリハビリテーションをされている方の、フォローアップの専門的評価（心肺運動負荷試験・歩行分析）を行い、訓練の成果で機能改善していることを数値でお示ししています。

（リハビリテーション科診療科長 藤谷 順子）



リハ室



歩行分析実施中

4月10日、国立看護大学校の入学式が行われました



雲一つない晴天の下、国立看護大学校の「令和5年度入学式」が開催されました。晴れて入学した看護学部102名、研究課程部13名が参加しました。5月8日に新型コロナウイルス感染症の5類への移行が予定される中、久々に新入生のご家族にご参加いただける形での開催となりました。

萱間大学校長は、その式辞の中で「ヒューマンケアは苦しみの中でも互いに手を取り合い、支え合おうとすることです。それが、皆さんのすべての学びの根底にあってほしいと願います」との言葉で、人の苦しみに寄り添うヒューマンケアの重要性を強調しつつ、入学を祝福しました。

来賓の厚生労働省浅沼大臣官房審議官は、少子高齢化に伴う医療ニーズの変化に対応するために、患者・家族や地域社会の個別性、多様性に対応した看護サービスを提供することが求められていることに触れつつ、学生達への期待を口にされました。

NCGMを代表して祝辞を述べた国土理事長は、「将来的にナショナルセンターを始めとする高度医療機関や、大学、行政機関、国際医療協力の現場などにおいて、大

いに活躍されることを期待しています」とエールを送りました。

学生達の表情は、入学の喜び、今後に対する期待と不安など、様々な感情が入り混じったものに見えました。コロナ禍で高校時代の3年間を過ごした方も多い今年の新入生ですので、若者らしく活発に活動いただける大学生活になることを心から祈っております。



入学式の様子



祝辞を述べる
国土理事長

萱間大学校長



研究所部門シリーズ
No.5

細胞組織再生医学研究部

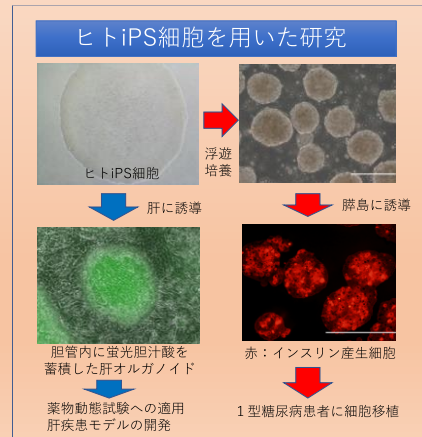
～再生医療の実現を目指して～

当研究部は、ヒトiPS細胞やモデル動物を活用することで、糖尿病や肝疾患の病態解明と治療を目指した研究を行っています。

糖尿病研究では、遺伝性の糖尿病（MODY）患者さんからiPS細胞を4種類樹立しました。またヒトiPS細胞から膵島を作製して糖尿病モデルマウスに移植すると、血糖値を正常化させることに成功しました。臨床応用として、1型糖尿病患者さんに投与するという新しい膵島移植療法の開発を目指しています。

肝疾患研究では、脂肪肝から肝炎を発症し、やがては肝硬変・肝発癌に至る疾患であるNASHを中心に、病態が進展するメカニズムを細胞および分子レベルで明らかにすること

を目指しています。また、ヒトiPS細胞から培養皿上でミニ肝臓（オルガノイド）を作製して、新薬開発の際に必要な薬物動態試験への適用や肝疾患モデルの開発を目指しています。（部長 大河内仁志）



研究所部門シリーズ
No.6

疾患ゲノム研究部

～希少難治性遺伝子疾患の疾患遺伝子同定と病態解明を行い、治療開発へ繋がります～



疾患ゲノム研究部は2021年1月に発足した新しい研究部です。当研究部では、遺伝要因が未同定のヒトの単一遺伝子疾患（一つの遺伝子変化によって病気が起こる疾患）の新規疾患遺伝子を同定し、その発症メカニズムを明らかにすることを目的としています。

単一遺伝子疾患は患者さんの数

が少なく、研究や医療品開発が進みにくいため、診断法や治療法が確立していない場合も多いです。私たちは国内外（チリ、ニュージーランド、マレーシア等）の研究者と共同研究を行い、主に次世代シーケンサーを用いた網羅的ゲノム解析（エクソーム解析、全ゲノム解析）を行い、病気の原因を明らかにするという研究をしています。これからも、患者さんが少ない希少難治性遺伝子疾患の研究を行い、一つでも多くの病気の原因を明らかにし、新しい診断法・治療法の開発を行い医療に貢献していくことを目指しています。

（部長 三宅紀子）

研究所部門シリーズ
No.7

脂質生命科学研究部

～脂質生命科学研究から新たな生体脂質機能発見へ！～

私たちは多様な生体膜リン脂質の機能解明から疾患克服の一端を担いたいと思っています。生体膜リン脂質は結合する脂肪酸の種類などから生体には1000分子種以上存在します。なぜ飽和脂肪酸やオメガ3脂肪酸、オメガ6脂肪酸に体に良いや悪いがあるのか？包括的な脂質分析技術を駆使して分子レベルで研究しています。実際に、このリン脂質の多様性を決定する遺伝子群を欠損すると視覚、生殖、疼痛、呼吸など様々な生体機能に影響することをマウス研究で発表しています。また、ヒト疾患においても組成は変動しますので、バイオマーカー探索研究も

行っています。脂質は細胞膜の成分、エネルギー、メディエーター、バリア機能に関わります。生命の誕生や進化にも重要であったと考えられている脂質を分子レベルで賑やかに研究しています。ご興味ある方はご連絡ください！（部長 進藤英雄）



研究所部門シリーズ
No.8

分子糖尿病医学研究部

治療薬の進歩によって、糖尿病患者の寿命は延伸していますが、高血圧や脂質異常症などのように患者の生活に負担にならない治療法はまだなく、また治癒させることもできません。さらに、糖尿病では、サルコペニア、認知症、癌、NASHなどの併存症のリスクも増大します。このような糖尿病や、その合併症・併存症は、さまざまな臓器でのインスリンの作用不足や時には作用過剰が原因となっていると我々は想定しています。当研究部では、糖尿病やその合併症・併存症の画期的治療法の開発には、これまでに知られていない各臓器でのインスリン作用とその障害のメカニズムの全容解明が必

要と考えて、さまざまな遺伝子改変マウスや患者さんの検体を用いた研究を行っています。これまでに、インスリン作用の不足によって、膵臓のβ細胞が減少して糖尿病が進行すること、骨格筋のインスリン作用不足でサルコペニアが起きるメカニズム、肝臓や腸管のインスリン作用不足によるNASHや肝癌が起きるメカニズムについて解明してきました。「糖尿病のない世界」を目指した研究を続けています。（部長 植木浩二郎）



糖尿病におけるサルコペニア・老化の促進メカニズム (Sasako et al. Nat Commun 2022)

研究所部門シリーズ
No.9

分子代謝制御研究部

～糖尿病の分子機構の解明と治療標的の同定を通じて、新規治療法の開発を目指します～

世界の糖尿病人口は5億3700万人(成人の約10人に1人)を超え、今後も増加すると予想されています。

糖尿病の大部分を占める2型糖尿病は、肥満に伴い発症することが多く、インスリンの分泌と作用とが様々な程度で障害され、高血糖や高脂血症を来します。そのため腎、眼、神経における合併症、動脈硬化性疾患、非アルコール性脂肪性肝疾患 (NAFLD)を惹起します。

肝がんなどのがん発症リスクも増加させ、世界的な健康上の問題となっています。肝臓は糖・脂質代謝調節に中心的な役割を果たし、代謝調節因子を産生する機能も備えています。これらの異常により2型糖尿

病の多彩な病態が形成されますが、その分子機構には未解明の部分が多く残されています。

本研究部では、糖尿病の肝病態の分子機構の解明と新たな代謝調節因子の探索から治療標的となる分子を見出すことで、糖尿病とその合併症、NAFLDや肝がんの新規治療法の開発へ貢献できるよう日々研究に取り組んでいます。(部長 松本 道宏)



研究所部門シリーズ
No.10

臓器障害研究部



臓器障害研究部は、糖尿病の慢性合併症における臓器障害の調査・研究、及び診断・治療法の開発を行うことを目的として2009年に発足した研究部で、合併症由来の臨床検体の採取が比較的容易な糖尿病腎症を主要な対象として、プロテオミクスを含むオミクス研究の手法で研究を行っています。

2014年度以降に、NCGMセンター病院、JR東京総合病院、東京

山手メディカルセンター、千葉東病院に通院した2型糖尿病患者について、1年に1回の血液、随時尿検体採取、臨床情報取得を行うコホート研究を実施しており、既存の尿中アルブミンやeGFR以外で腎機能低下を予測するタンパク質マーカーを含む予測因子をいくつか報告しています。

また、千葉東病院・腎臓内科との共同研究にて腎生検の残余組織標本を研究対象としたマルチオミクス研究も実施しており、これらの研究が糖尿病腎症の新規診断および治療に有用な生体分子の発見につながることを期待しています。

(部長 鍋木 康志)

5月12～19日、「看護の日」展示を行いました

ナイチンゲールの誕生日にちなみ、5月12日は「看護の日」と制定されています。

これにちなみ、センター病院と国府台病院の看護部では、期間中「看護の日」の展示を行いました。

センター病院では「いのちをまもるプロとして」をテーマに、アトリウムとデジタル掲示で紹介しました。

国府台病院では、看護部からのメッセージやポスターを掲示しました。

<センター病院>



<国府台病院>



国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.0

“規範セッター”という仕事を
知っていますか。

“規範セッター”とは「高度な専門性を持ち国際的組織技術諮問委員などに参加し、国際的規範・基準づくりに携わる委員」※ のこと。

国際医療協力局には、現在6名の“規範セッター”が在籍し、WHOガイドラインの策定や評価等に携

わっています。

「国際的規範・基準をつくる場」に日本人をおくり、国際的影響力を強めていくことは保健医療外交上もきわめて重要なことです。

本シリーズでは、国際医療協力局に在籍する6名の“規範セッター”の仕事と役割を紹介してまいります。

※厚生労働省 国際保健に関する懇談会
国際保健政策人材養成ワーキンググループ報告書より

国際医療協力局には6名の規範セッターが在籍しています

<p>小原ひろみ 医師</p> <p>WHO 西太平洋地域事務局 新生児プログラム独立レビューグループ委員</p> <p>WHO 本部 「妊娠出産と周産期の優先WHO 推奨改訂」に関するガイドライン策定委員</p> <p>WHO 本部 「母と新生児情報の成果と結果トラッキング」 技術諮問委員会委員</p>  <p>HIROMI OBARA</p>	<p>野崎成功真 医師</p> <p>グローバルファンド技術審査委員会 技術審査委員 (HIV)</p>  <p>IKUMA NOZAKI</p>	<p>馬場俊明 医師</p> <p>WHO 本部 ガイドライン評価委員会 外部委員</p>  <p>TOSHIAKI BABA</p>
<p>駒田謙一 医師</p> <p>パンデミックファンド 技術諮問委員会 技術諮問委員</p>  <p>KENICHI KOMADA</p>	<p>宮野真輔 医師</p> <p>WHO 西太平洋地域事務局 HIV 梅毒母子感染排除に関する アジア太平洋地域 専門家パネル委員</p> <p>グローバルファンド技術審査委員会 技術審査委員 (結核、HIV) 結核専門家チームリード</p>  <p>SHINSUKE MIYANO</p>	<p>永井真理 医師</p> <p>WHO 本部 避妊具の使用に関する医学的な適格基準 および具体的な実践に関する推奨の 策定委員会委員</p>  <p>MARI NAGAI</p>

竹内史比古メディカルゲノムセンター・遺伝子診断開発室長が、 Circulation Journal Awardを受賞しました

授賞式は、3月10日～12日に開催された第87回日本循環器学会学術集会で行われ、Circulation Journal誌に2022年に掲載された全原著論文の中からClinical Investigation部門の最優秀賞に選ばれました。循環器疾患やがんのリスクとなる喫煙について、個人の喫煙歴が末梢血DNAの生化学検査で評価できるという研究です。竹内室長は「NCGMセンター病院の検体の解析により、禁煙しても20年以上前の喫煙歴が現在のDNAメチル化に影響していることが分かり驚きました。個別化医療への応用に期待しています」と語りました。

受賞題目：Clinical Implication of Smoking-Related Aryl-Hydrocarbon Receptor Repressor (AHRR) Hypomethylation in Japanese Adults



国際医療協力局グローバルヘルスレポート “規範セッター”という仕事

Vol.1

WHO本部

避妊具の使用に関する

医学的な適格基準および具体的な実践に関する推奨策定委員会委員

永井 真理（専門職/医師）

これまでに、グローバルファンドと世界保健機関（WHO）で規範セッターを務めてきました。

「こんな委員を求めています」と世界的に募集がかかるので、自分の専門に合わせて応募書類を送るのが第一歩です。

2022年11月からは、避妊のガイドラインを作るWHOの委員をしています。私自身は、もともとはNCGMで研修を受けた内科医なのですが、低中所得国では妊娠出産が命に直結します。安全なお産や避妊や中絶には、医師や助産師がどこに何人くらい必要か、彼らが能力を発揮できるようにどんな環境を整えるか、医薬品をどう届けるか、などの仕事にたくさん関わったのが、今の規範セッター業務につながっています。国際協力局員ほど多様な現場経験を持つ規範セッターは世界的にもあまりいません。豊富な現場経験をもとに、誰にでも使いやすいガイドライン作りに貢献できます。COVID19流行時の渡航制限中は、オンラインで規範セッター業務をしていました。「一週間以内に読んでコメントちょうだい！」とSOSメールとともに大量の書類が届いたり、夜中のオンライン会議が多かったりで大変でした。ただ、寝る前にコメントを送っておき、アフリカや欧米の委員に私のコメントをもとに次にすすめてもらったりなど、時差もうまく利用しました。

久しぶりの対面会議では、朝から晩までみんなで議論して、本当に楽しかったです。



他の委員たちと「Yes We Can!」とポーズ

オンラインで大集合！セラピードッグイベント

センター病院小児科子どもの療養環境を考えるWG一同

2月17日、災害救助犬やセラピードッグの育成・派遣を中心に世界で活動するNPO団体、日本レスキュー協会主催の『オンラインセラピードッグイベント』が、NCGMで開催されました。

今回は、前回の開催場所であるプレイルームだけでなく、子ども達のご家族と一緒に、また保育士さんと一緒にお部屋からイベントに参加しました。

プレイルームでは大きなスクリーンを出して準備万端！わくわくしながら待つ子ども達の前に、セラピードッグ達が登場です。

スクリーンには、セラピードッグ達のかわいい姿に、お友達の笑顔、よく知っているスタッフの顔も映って“みんなが大集合”しました。前日から『推しわんこ』を決めていた子ども達。プレイルームとお部屋から、『推しわんこ』のプラカードを振り合います。

順番に登場するセラピードッグ達は、お着替えや特技を披露してく

れました。

なかでも『推しわんこ』の登場には、思わず歓声が飛び交います。セラピードッグ達が見せてくれるいろいろな表情に、子ども達の瞳はきらきら。気がつくと大人も、セラピードッグ達のかわいい仕草に釘付けになっていました。

セラピードッグ達におやつを選んであげる“もぐもぐタイム”では、『推しわんこ』に食べてほしいごはんを一生懸命考えて選びました。そして今回のじゃんけん大会では…セラピードッグ達が連勝でした！夢中になった交流の時間、心も身体もぽかぽかです。

楽しい時間はあっという間…。セラピードッグ達と過ごす時間は、みんなの気持ちがぎゅっと寄り添うような、そんなあたたかな時間でした。

笑顔いっぱいのおあたたかな時間をお届けいただいた日本レスキュー協会の皆さまに、心より感謝申し上げます。



本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
NCGM 広報企画室



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。